G7の開催地コーンウォール余話

地元力発見！⑰

佐藤建吉　「洸楓座」代表

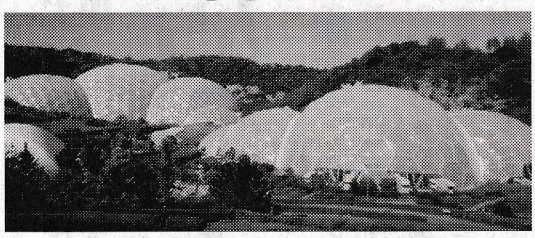
かつては英国の「5つ目の地域」と揶揄

2021年6月11日から開かれたG7は、英国コーンウォール（Cornwall）の、美しい砂丘海岸の保養地カービス・ベイとセント・アイヴスが開催地となった。G7参加代表者たちは、トレジェンナ・キャッスルに宿泊し、隣接したホテルCarbis Bay Hotel and Estateで会議が行われた。

会議の前、セント・アイヴスの手前のセント・オーステルにある「エデン・プロジェクト・ドーム」の前で、エリザベス女王とG7参加代表者が集まり記念撮影をした。「バイオーム」と呼ばれる、サッカーボールの縫い目の様な六角形と五角形のプラスチック壁枠で構成された巨大なドームは、陶土を採掘した跡地の広い窪地を甦生させるために造られたもの。

ドームの中では、熱帯雨林やサバンナなどの植物群が人工的に維持されていて、人工環境での動植物の持続可能な生態維持の実験や教育、ワークショップや展示の場、観光など、複合エコ観光施設となっている。

このコーンウォール、かつては、イングランド、ウエールズ、スコットランド、北アイルランドの4カントリー（国）とは別の地域だとして、「英国は5つの地域からなる」と揶揄されたこともあった。イングランドの最南西部に位置し、プリマスを流れる川幅300㍍を超えるテイマー川の川向うにあるコーンウォールは、それほどの辺境の地であった。



▲エデン・プロジェクトのバイオーム外観

可能性を秘めた「ランズエンド」

コーンウォールへの交通不便を解決したのは、19世紀英国の偉大なエンジニア、イザムバード・キングダム・ブルネル（Isambard Kingdom Brunel、1806～59）である。彼は、テイマー川にメガネ形の2連の高架鉄橋を架けることで、ロンドンからコーンウォールの端部のランズエンド（Land's End）の入り口ペンザンスまで、蒸気鉄道を引くことができた（1867年）。超広軌を採用したこの鉄道の開通で、ロンドン・パディントン駅からコーンウォールへの鉄道旅行が大人気となり、路線は"コーニッシュ（Cornish＝コーンウォールの別称）・リヴィエラ・エクスプレス"と愛称された。毎日、午前5時30分パディントンからペンザンス行きの新聞急行が走るようになり（小池滋氏『英国鉄道物語』）、「辺境の地」の汚名は返上された。

▲ロイヤルアルバート鉄道橋（著者撮影）

今回のG7では、代表者たちがランズエンドを訪ねたとの情報はないが、そこは英国の産業革命の動機づけとなった銅や錫などの産出地で、鉱山での排水（揚水）ポンプの動力源用蒸気機関の発祥の地でもある。筆者は、もう21年も前のことだが、ヒースロー空港でレンタカーを借り、ボーンマス（Bournemouth）の大学での学会に参加した後、7日間かけてランズエンドまで駆け巡ったことがある。

まず古都エクスター（Exeter）に移動し、ペイントン（Paignton）、ダートマス（Dartmouth）、プリマス（Plymouth）と海岸を左回りに訪ね、ブルネルの大気圧鉄道の路線跡やパブ、ニューコメンの蒸気機関、さらに帆船などの見どころを見物。テイマー川を越えてコーンウォール、ペンザンス、ランズエンドへ。ランズエンドは文字通りイングランド&コーンウォールの端である。その末端の崖下にある石造りの野外劇場ミナック・シアター（Minack Theatre）では、シェイクスピアの『テンペスト』がよく上演される。

イングランドの最南西端に臥龍のように横たわるコーンウォールは、その地形のように潜在力を潜めている。ここでG7が行われたことに、ポストコロナの新時代の世界に向けた意義を見出すことができるかもしれない。

1950年山形生まれ。東京都立大院卒。元千葉大大学院工学研究科准教授（金属疲労専攻）。金属疲労の研究のほか、他分野のテーマの研究開発に努めるとともに日本各地の地域おこし活動に従事する。ローカル鉄道と地元の酒蔵のコラボで地域再生を図る地酒「鐵の道」の製造・販売を企画、すでに10件を超える銘柄を送り出している。一般社団法人「洸楓座」代表。「全国ふるさと大使連絡会議」理事